

ごもくやさん「生き物撮影係」活動記

中田一真（ごもくやさん 生き物撮影係）

1. 「生き物撮影係」とは

里山管理のボランティアグループ・ごもくやさんは、2010年の発足以来、兵庫県三田市ウッディタウンの中央公園を中心に、この街に残る里山林の除間伐を行ってきた。私はごもくやさんの生き物撮影係として、手入れの進む森とそこに現れる動物たち、身の回りの虫や花など、ごくごく身近な生き物たちを記録している。

ここが里山だった頃のもの、開発の後に入ってきたものが入り乱れて暮らすこの街の生き物は、思いのほか多種多様。日々、何をどうやったら撮れるだろうと頭を悩ませながら撮影を進めている。私の撮影スタイルは、いわば畏れず+採集。動物や野鳥を1日24時間・年間365日待ち受ける自動カメラを森に設置し、週一回その点検・データ回収の道すがら、発見した生き物をスナップする。また、本業は会社員なので、平日、三田から大阪に通勤する行き帰り、最寄り駅まで30分の道すがら（途中、中央公園を通過する）、カバンに忍ばせた通勤用カメラで、出会った生き物たちを撮影している。

生き物撮影係の出番には以下のようなものがある。

(1) 中央公園主催の自然観察会案内人

中央公園で夏冬の年2回開催される自然観察会案内人を2010年以来担当。園内での生き物探索ガイドと、ウッディタウンの生き物の最新映像を紹介。

(2) 中央公園の機関紙「ChuChu めーる」の連載

2010年の創刊号以来、中央公園の生き物を写真と文章で紹介する「森の絵はがき」連載中（最新号は2021年11月1日発行の40号）。



(3) 三田市こうみん未来塾「カメラは見た！わたしの街のなかまたち」講師

三田市 子ども・未来部 子ども未来室 健やか育成課が主催する「こうみん未来塾」のプログラムで、「カメラは見た！わたしの街のなかまたち」の講師を2021年から担当。三田の身近な生き物を写真や動画で紹介する他、撮影方法の伝授や自動撮影体験も。

(4) 小学校環境学習のお手伝い

中央公園で実施する小学校の環境学習で、生き物観察ガイドや写真・動画の上映をしたり、学校への出前授業にもできる範囲で対応。

その他、撮影した作品は自身のホームページやSNSで、動画はYouTube「ごもくやさんチャンネル」で発信中。

中田一真のホームページ <http://www.asahi-net.or.jp/~jx7k-nkt>

ごもくやさんチャンネル <https://www.youtube.com/channel/UCL21WtdsQng2nLKvflJpMFA>

最近は自動撮影を中心に、撮影方法に関する問い合わせを頂くことがあり、それならばということで、今回の「共生のひろば」の報告は、私の撮影方法を含む活動内容についてご紹介することにした。もしも、どなたかのお役に立つことがあれば、幸いである。

2. 生き物スナップいろいろ

(1) 鳥を撮る

ごもくやさんの生き物撮影係として活動する前は、野鳥写真家として活動していたので、500mmクラスの大砲のような超望遠レンズ付カメラを載せた重い三脚を担いで歩き回っていた。自動カメラの設置場所が増え、点検のための歩行距離が長くなるにつれ、機材はどんどん縮小し、今ではデジタル一眼カメラに300mmF4+1.4倍テレコンを装着し、手持ちで撮影するのが基本になった。手持ちには軽量化以外にもメリットがあって、シャッターを切るまでのタイミングがワンテンポ早い。三脚を担いだ状態で鳥を見つけた場合、①三脚を立てて、②レンズを鳥に向け、③シャッターを押す、という3つの動作を伴う。手持ちの場合、①が省略できる。これまで①でまごついている間に逃げられていた鳥も、手持ちに変えて随分拾えるようになった。手持ちはアングルの自由度も高い。なお、手振れを防ぐためISOは高感度を使う。



水面を走るオオバン



鳴くヒヨドリ



野鳥撮影セット

(2) 水中の生き物を撮る

すべての生き物を相手にする以上、慣れない水中撮影や、夜のフラッシュ撮影にも、いやおうなしに取り組まざるを得なかった。水中撮影は当初、水槽にカメラを入れて沈めたり、100均のタッパーウェアを改造してハウジングにしたりとシンプルなものだった。その後、コンパクトデジカメに水中ハウジングと水中ストロボを導入したりして色々試してみたが、相手にするのはカエルやサンショウウオ、ザリガニなど、大抵、浅い水辺の生き物で、一番大事なのは泥を巻き上げないこと。そこで今は、生き物を水中に見つけたら、常時持ち歩いている小型の完全防水カメラを素早く沈め、時間をかけずに撮るというスタイルに落ち着いている。



小型防水カメラとワイヤレスライン



セトウチサンショウウオの卵のう



水底に潜むセトウチサンショウウオ

(3) 夜の虫や蟲を撮る

夜行性の虫や蟲も多いから、夜の撮影に出かけることも多い。当初、マクロ用フラッシュを使えば綺麗に写るのかと思っていたら、平板な絵になってしまい、期待した程ではなかった。これに加えて、棒の先に装着したフラッシュを、被写体の斜め後ろに差し出して逆光気味に当てると好みの絵になると分かってからは、なんとかの一つ覚えのようにその方法に拠ってきた。

最近世間のマクロ撮影のライティングは、できるだけ大きなディフューザーを使用して被写体にまんべんなく柔らかい光を当てた画像が主流になってきている。昭和生まれの私も、世の流れについていこうと、新しいライティングの試行錯誤を始めたところだ。



夜間マクロ撮影セット



クマゼミの羽化

3. 自動撮影に取り組む

生き物撮影係を引き受けて、一番困ったのは動物撮影だった。夜行性がほとんどで、糞や足跡などの痕跡はあっても、昼間、姿を見ることはまずない。経験のない自動撮影に取り組むほか道はなかった。インターネットで検索し、見よう見まねでカメラとセンサーとストロボを組み合わせ、コンテナボックスを加工して機材を収納する箱を作る。そんな作業を繰り返してきた。最近では、地面に直置きするタイプの箱や、持ち運びが容易な箱など、用途や撮影する画像にあわせてカスタマイズしている。ちなみに私は技術者でもなんでもなく、小学生が豆電球を光らせるレベルの電気知識と、電動ドリルで穴を開ける程度の工作技術しか持ち合わせていない。「こんなのでいいんですか？」と実物を見た人から酷評される出来栄の箱を、野外で既に10年以上壊れることなく使用し続けている（中のカメラは最近になって壊れるものが出始めた）。

現在、ウディタウンの中に仕掛けた自動カメラは作品づくり用の一眼レフ4台、観察用のトレイルカメラ8台（うち通信機能付2台）。獣道、巣穴前、水辺が設置ポイントだ。これまでに自動カメラが捉えた哺乳類はキツネやタヌキ、アライグマやアナグマなど15種、鳥類は59種を数える。中でもオオコノハズクやミゾゴイ、ノゴマやムギマキなどは、私自身、ウディタウンでは自動カメラに写った映像でしか見たことがない。自動カメラの威力をまざまざと見せつけられる。



【最近のカメラ箱】撮影用途に応じてカメラ箱を製作する



地面直置き型カメラ箱



持ち運び型カメラ箱



オオコノハズク



アライグマ

4. 活動をまとめる

こんな風にして、得手不得手にかかわらず、身の回りの生きとし生けるものたちすべてを撮影しようと奮闘した記録をまとめた小冊子が、昨年の共生のひろばでも報告した「ウッディタウンのなかまたち ニュータウンの森と水辺と庭先で」(ごもくやさん) (2020. 10. 1 発行) だ。

現在、町内の小学校の環境学習や、中央公園主催の自然観察会で活用している。

5. 今後の取り組み

現在、縁あって、三田市木器にある古民家周辺の里山再生の取り組みに、生き物撮影係として参加している。本格的な里山で、ここにはニュータウン開発で失ったものがまだたくさん残っている。自動カメラもセットし、継続的な観察を続けているところだ。この10年でごもくやさん「生き物撮影係」の撮影方法のバリエーションはずいぶん増えた。新しい舞台に登場する生き物たちも、またどこかの機会でご紹介できればと考えている。



ごもくやさんでは、設立10周年を記念して、小冊子「ウッディタウンのなかまたち ニュータウンの森と水辺と庭先で」を発行しました (A5 版カラー40 頁)。ウッディタウンの四季折々の生き物たちと、この10年間の森の出来事を写真と文章でつづります。

この冊子は小学校の環境学習や中央公園の自然観察会で活用しています。

三田市中央公園、駒ヶ谷運動公園管理事務所にて1部400円(税込)で販売中。郵送販売は中央公園管理事務所までお問合せ下さい。